



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	益田勝実を読む：「『上代文学史稿』案」のひらいたもの
Author(s)	身崎, 壽
Citation	国語国文研究, 134, 1-14
Issue Date	2008-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93364
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_134-01-14.pdf



益田勝実をよむ

——『上代文学史稿』案のひらいたもの——

身 崎 壽

移り行く時見ることに心いたく昔の人し思ほゆるかも

(大伴家持 万葉集卷三〇・四四八三)

本稿でわたくしは、益田勝実の論文『上代文学史稿』案について考察する。同論文は、

「上代文学史稿」案 『日本文学史研究』三 一九五〇年一月

「上代文学史稿」案(二) 『日本文学史研究』四 一九五〇年六月

* 益田「物語文学と歌語り」(『体系物語文学史』一、一九八

二年九月) 注(2)による

「上代文学史稿」案(三) 『日本文学史研究』六 一九五〇年九月

「上代文学史稿」案(四) 『日本文学史研究』七 一九五〇年一〇

月

という次第で公表され、未完のまま、その後益田のどの著書にも、そのままのかたちでは再録されず、近時刊行された著作集『益田勝実の仕事』にも収録されていない。これは著者自身の意向によるも

のなのだろうか。だとしたら、この論文をあえてあげつらう本稿のころみは、著者の意向にそわぬものになるのかもしれない。いまから六〇年ほどまえにかかれたこの論文は、しかし古代後期文学史叙述として、いまもつてたぐいまれな存在で、おおくのひとによまれ、また批判的に検討される意義のある論文だともう。

本稿のころみは、もともとはわたくしの「歌語り」論、なかんづく「万葉の歌語り」論に対する関心に発するものだ。だが、その「歌語り」論への関心自体、そのみにとどまるものではなく、ひろくはウタとカタリとの交渉を軸とする古代(前期)文学史の構想につらなるものとしてある。だから、益田がこの論文のとうとうとしたところを、的確に、また部分的にはなく全体像として、理解する必要があると痛感するものだ。

さて、この論文を起点として益田により提起され、文学史概念として確立しているといつてよい「歌語り」論だが、はたしてそれは真に益田の提起をうけとめ、理解したものとなっているだろうか。

わたくしは、益田の「歌語り」論が、その基底に関する真の理解を欠落させたままに流通してしまっているのではないか、というおもいをすてきれないでいる。その原因のひとつに、「歌語り」論の始発点となった『上代文学史稿』案が、本当にはよまれていないという現実があるのではないだろうか。たしかに、益田自身のちに、

わたくしは、『日本文学史研究』の『上代文学史稿』案の中で、〈歌がたり〉を論じたが、ドラドラとした文学史論のなかにそれが埋没しそうなので、すこし後に〈歌がたり〉の問題だけを独立させて、『季刊国文』という小さな雑誌に「歌語りの世界」（一九五三年）を書いた。

といっているように、この論文では古代後期文学史の野心的な構想が展開されていて、「歌語り」論はその一部でしかない。しかしまた、ここで益田が言及している『季刊国文』（東京文科大学〈現二松学舎大学〉国語国文学会）第四号所収論文も、その後の研究史のなかで十分に検討されたかどうかたがわしい。

では、益田の「歌語り」論はどのように受容され理解されたのか。それは、おおく『説話文学と絵巻』（古典とその時代）Ⅴ、一九六〇年二月所収の論文によって理解されているのではないだろうか。「歌物語」というジャンルを、それまでの通念をやぶって『説話文学』として正當に位置づける、その前提としての「歌語り」論の体系化は、『説話文学と絵巻』所収論文によって、たしかに整理され純化されているだろう。

しかし、その代償として、そこでは、「歌語り」概念の提唱の基底にあった益田の強固な文学史認識への志向が、かげをひそめてし

まっている。むしろわたくしはそのことをおしむ。

かくて、『上代文学史稿』案は、その公表当時やその後、益田の周辺にいたひとびとはさておくとしても、その他の研究者——同時代、後続世代をとわず——には、まともにとりくまれぬままになっっているようにおもわれる。益田自身のもちいた表現（わたくしはそれを、益田が敬愛する風巻景次郎に対してもちいたのをきいたことがある）をかりれば、それは「野垂れ死に」してしまい、しかして、よまれないままにそれは、まつりあげられ、敬してとどげられてきた、というのが本当のところなのではないだろうか。

むろん、『上代文学史稿』案の重要性を認識している少数の研究者が、かつてもまたいまも、いることを否定するつもりはない。それまで、やはり『説話文学と絵巻』で益田論を理解するにとどまっていたわたくしが、はじめてこの論文に接したのは、神野志隆光氏がそのコピーをおくってくれたことによる。当時、神野志氏とわたくしとは『万葉集を学ぶ』第七集所収の「歌語り」関連論文を執筆することになっていた。両者のたれば正反對だったから、神野志氏は「敵に塩を贈る」挙にでたものか、それともわたくしの認識不足をただす意図にもとづくものだったのか、そのところはわからないが、すくなくともその時点で、神野志氏がこの論文の意義を正當にみとめていたことはまちがいないだろう。

さいわいにして「歌語り」論の始発点として『上代文学史稿』案がとりあげられるばあいでも、そこにはたいてい、ひとつの限界がある。おおく、そこでは「歌語り」論が具体的に展開される『上代文学史稿』案（二）に関心があつまり、他の部分には十分な関心が

はらわれない(そういえば、神野志氏がわたくしにおくつてくださったのもこの(二)だったとおもう。わたくしがその全貌に接したものは、ずっとのちに北大に赴任して、付属図書館の書庫のかたすみに、劣化がすすんでひどくいたんだ『日本文学史研究』のひとそりを発見してのちのことだ——余談にわたるが、今日なかなかてにとりにくい同誌が北大に所蔵されているのも、ひとえに風巻景次郎の存在のゆえだったろうと、わたくしは憶測している)。

益田の「歌語り」論を正當に理解するためには、四部からなるこの論文の全体像の把握が必要だが、すくなくとも最初の「上代文学史稿」案(後統の論文がかれたことによつて、この論文はその(一)にあたることになったわけだが、同論文には(一)という表示はない)の検討は不可欠だとおもわれる。

これが、わたくしが「歌語り」論の検討にあたつて、益田自身が「歌がたり」の問題だけを独立させて論じたとのべている論文「歌語りの世界」ではなく、あえて「上代文学史稿」案の方をとりあげる理由だ。

なお、論の性格のしからしむところ、本稿ではこの論文からの引用がおびただしくなることが予想されるが、この論文をめにするものがかならずしも容易ではないかもしれない現状にかんがみても、それはゆるされることなのではないだろうかとかんがえる。

*

論文(一)は、当然のことながら益田の文学史(歴史)認識の表明からはじまる。その詳細をここに検討の対象としてよび出す必要はないだろう。むしろ、その可否を論ずることが無意味なのではな

い、というより、それは益田文学史論の基底としてぜひともわれなければならぬ問題だが、それにはこの論文執筆当時の学的・思想的状況、とりわけ歴史学研究的状況の評価が不可欠で、にわかにとりくめる問題とおもわれぬ。わたくしとしては、「歌語り」論の定位に必要な範囲内で、益田がこの時点でどのような文学史的展望をこころみているか、その事実を事実としてなるべく確実に把握することをめざしたい。

だがまず、益田がこの論文でもちいている「上代」という語について確認しておこう。この語はともすれば誤解されやすい用語だからだ。しばらく益田の説明をきこう。

原始日本に続く第一の段階と第二の段階をも、一応別物として夫々に性格を考察しようとする作業方便から、一つを古代・他を上代と仮に呼んでみたわけで：

ここに、益田のいうところの上代は、現在わたくしたちがもちいている古代前期の意味ではなく、かえつて古代後期、いわゆる中古あるいは平安朝時代をさすことがあきらかにされる。これは、どういう観点からしても——この時点でさまざまに提起されていた文学史の時代区分や用語のありようにてらしてもやはり——特異な用法だとおもうが、いまそれをいつてみてはじまらない。益田はどのように規定しているのだからそれにしたがうしかない。ではその「上代」は、どのような歴史的條件に規定された時代なのか。

ともかくも、日本の歴史に於ける古代国家の時代が、律令政治から摂関政治へ、庄園から荘園へと云ふ変動を、平安時代の第一四半期から第二四半期にかけてなしとげてゐる事は、今日も

はや疑ふものがなくなつた事である。文学史の分野でも、これに應ずる如くに、漢詩文期から自国文学勃興期への屈折が見られる。大ざつばに言つても、先進国の文字を以て、政治的に必要であつた所の文学、即ち「史」が作られた時期（紀記）から、純ラテン的文芸「集」が成立した時期（懷風藻以下）を經過して来た古代のラテン文学時代の性格と、上代の自国文学開花期の性格とはつきり区別されねばならない。

益田はこのように「上代」を規定し、一方、古代前期、万葉時代を、「ラテン文学時代」と位置づける。これも特異な表現だとはおもうが、イメージとしてはよくわかる。

万葉集を流れ貫く自国本来の文学精神は、未だ見るべきラテン的文学作品——紀記風土記の成立しなかつた前の初期万葉諸歌人の時代から、律令政治の充実によつて新に官製文学として出現した「史」の下に隠された次の万葉時代へと、一貫して流れて凝滞してはゐない。が、であるからと言つて、従来の文学史の様に、万葉集を律令政治の時代の、一貫した、代表的な文学と考へるのは誤りであると思ふ。

ここで益田は、万葉集一辺倒の俗流文学史に対して異議もうしたてをしているわけだが、この主張はある意味で——一定の留保条件を付して——正当なものだといわねばならないだろう。漢文脈の「史」「集」こそが古代前期の文学の主流だったというわけだ。ただし、益田のこのような『万葉集』評価の背景に、昭和戦前・戦中期における万葉集の特権的な評価軸に対する反発や嫌悪がかりにないとしても、また、そうしたうすべりな万葉集評価とはうらはらに停滞を

余儀なくされていた『万葉集』研究の状況を勘案したとしても、やはりそこに、古代前期和歌、『万葉集』の正当な評価にはとどかない面（というか、あえてめをそらしたきらい）があつたこともみとめなければならぬとおもう。

ともあれ、益田の『万葉集』の位置づけは、「ラテン的文学」＝漢文学の傍流、との域をでない。その点でいえば、益田とおなじく戦前・戦中期をすごした（ただし世代的にはすこしうえになるか）西郷信綱がその戦後の出発を『万葉集』論でたしたのとは対照的な位置に、益田はみをおいていたことになろうか。

それはさておき、このような益田の『万葉集』観が、「万葉の歌語り」論に対する否定的な評価——それは、第一義的には、これからみていくような文学史認識にてらして容認すべからざるものだったことによるとはいえ——に、いささかも影響をおよぼしていない、とはいえないだろう。というより、そのような文学史把握自体が、かかる『万葉集』評価にもとづくものだったことはうたがえない。ともあれ、さらに益田のいうところにみをかたむけよう。

日本文学史が漢文学史の中に飛沫をあげて没入した所に古代を見なければならぬ。

この状態を打破するところから文学史における上代がはじまるというわけだ。

上代の文学史は、この嘗て自国に萌え出た文字を押し続けてゐた古代のラテン的文学の後退から始まる。

このうち、益田は「歌」の問題、和歌の成立の問題へと論述をすすめていくのだが、このように益田の記述をたどっていくと結局は

『上代文学史稿』案」全体を引用した方がはよい、ということになりかねない。記述をおうことをはしよって、「和歌」と「叙事」の緊張関係の問題にふれているところからふたたびみていくことにしよう。

更に和歌の歴史の上で考へてみたい事は、これらの和歌を荷なつてゐた人々は、既に感動の極を謳ひ上げてのみ心ゆく様な、牧歌的奈良京の住民ではなかつた事である。彼等は奈良京から平安京へかけて、非牧歌的都市社会を建設して来た。これは文明文化の堆積と共に、彼等に何時か都市的貴族の性格を付与し、彼等は既に精神的に「抒情」の郷の住民ではなく、理智に頼る「叙事」の市民であつた。又摂関政治の成立によつて、和歌を歌合から勅撰集迄急速に培ひあげて来ると、忽ち培ひ上げられたものが基盤化し、更にそれ以上の段階を醸成した。

古今集撰進を期として、歌壇には私家集の出現、或は後撰集的な、叙事的要素に富んだ物語風な詞書の和歌が躍進的に出現する。古今集を生んだ基盤は、古今集を契機として、更に此处迄到らねば済まない様なものを蔵してゐたのである。そして一つの興味深い現象が行はれる。古今は後撰の歌壇と歌風を形成せしめたが、後撰以後の集は又物語的要素を喪失し、古今へ戻つて来る。叙事への異常な関心は鎮静する代りに、それは別の地に種子を下して、私家集・和歌的説話・歌物語、更に物語への方向へ延びる。

この記述は、益田の「上代文学史」の構想の全体像をあざやかにえがきだしたものといえるだろう。乱暴にまとめてしまえば、「歌」

から「物語」への重心の移動、という展望がその骨格だったということになる。そこにモールトンや土居光知以来のジャンル交替説のおもかげをみいだすのは勘ぐりにすぎようか。ともあれ、すでにここに「歌語り」論へのみちすじがほのみえていることはまちがいない。

ここでひとつ、自己批判をまじえつつのべておきたい。かつてわたくしは、伊藤博によつて提唱された「万葉の歌語り」論に対するもつとも根底的な批判者がほかならぬ益田勝実だということの理由として、益田が説話のがわから発想しているのに対して伊藤は和歌のがわからしていることによるものだ、という点を指摘したことがある（「左注的題詞型と歌語り」『万葉集を学ぶ』七集 一九七八年一〇月）。しかしその後、益田の『上代文学史稿』案」全体の構想を考慮するとき、そのようなみかたは皮相なものでしかなかった、と自己批判した（『万葉集の「歌語り」』『国文学』一九八一年九月）。そのところを再掲しよう。なおこの文中で引用している益田の文章は、本稿でものちに検討する同論文（二）からのものだ。

益田一九四九は「歌語り」の誕生の契機を、

昔話を育てる民衆の世界とは隔絶して、そこから不斷に口承文芸の輸入を仰ぐに次第に事欠く状況の下で、貴族達が自己達の昔話を歌中心に作つて行つたのが歌語りであらう。

と推定する。ではなぜそれがうたに関する「昔話」ないしは「世間話」でなければならなかつたのか。

和歌が漸く宮廷の中心に歩み出て来て、宮廷の文芸と言へ

ば、和歌が第一であつた様な上代初頭に於いて

といった記述や、

歌語りと云ふ口承される在り方は和歌の全盛に呼応したもので、初期の歌合から古今更に後撰へと、叙事的要素が和歌に導入されて来るのに応じた発達を遂げたもので、

という説明のしかたに、益田の解答がしめされている。ここには、〈歌枕〉の成立や〈引き歌〉の技法の起源などとも通底する、古今集期以後の和歌史的状况に対するひとつの見とおし、判断がはたしているはずだ。だから、益田がこの時点（「上代文学史稿」案）で和歌も散文もふくめ古代後期初頭の文学史状況をトータルに視野におさめて発言していたことはまちがいない。こうした前提にたつとき、和歌をめぐる歴史的なまた社会的な条件を基本的に異にする（と益田が想定する）古代前期、万葉時代には、〈歌語り〉の存在を想定すべくもない。筆者は旧稿のひとつ（身崎一九八二——これは一九七八のあやまり）で、益田と伊藤との対立を、前者が説話のがわから、後者は和歌のがわから〈歌語り〉にアプローチしていった、その方向性のちがいに起因するものではないかとのべた。しかし、みぎのようにみるなら、この旧稿のみかたは益田に関するかぎりあやまつていた——すくなくとも、のちに説話文学史論の体系化をめざしてまとめなおされた『説話文学と絵巻』（六〇年二月）においてでなく、「上代文学史稿」案において構想していたところのものをとらえそこなつていたことを、率直にみとめなければならぬ。

引用の引用というかたちにならざるをえず、よみにくいものになつてしまつたが、むろん現在のわたくしの認識もこれにちかい。ただ、現時点であえてこれにつけくわえることがあるとすれば、益田は「歌語り」や「歌物語」を論じつつ、ずっとさきに「物語」（むろん「説話ではない」）すなわち散文の時代の到来をみすえていたことはまちがいないだろう。というより、益田の構想した「上代文学史」は物語文学史、したがって「上代文学史稿」案は「物語文学史」序説だつた、といえようか。そのことは、この論文をよみとおしてみればだれのめにもあきらかになるだろう。しかし、てつとりばやくたしかめようとおもうなら、「未完」とされながら実際には最終稿となつた同論文（四）、13の最後の、つぎのような文言を確認しておくだけでよい。

そして上代は実に散文の時代である。（中略）上代前期に栄えた和歌が、前時代的性格のものゝ過渡期的復興が固定したものであると考える時、その過渡期的前時代的なものゝ後に来る散文こそ上代を上代として特色付けるものではないか。

この益田の基本的なパースペクティブに関しては、のちにすこしくふれることにしよう。

さて、わきまにそれて紙数をついやしてしまつたが、（一）の検討にもどらう。さきの引用につづく記述に、わたくしとしてはおおきな共感をおぼえる。

古代に於いて、ラテン的文学「史」「集」の繁栄の間に、独り唱歌のみが自国の文芸としての存在をはつきりさせてゐた主要な理由は、和歌が「話」の様な他のこの国の文芸及び文芸的萌芽

よりは、強力に社会生活に生活の具として食ひ込んでゐた点にあるが、その和歌が、仮名文字の弘通を見、仮名文字で歌合日記ものさされる歌合の舞台を経験して来たのである。一方に於いて、菅家万葉の如く、万葉仮名が使用されてゐたにせよ、既に心緒を綴るに足りる仮名文字が和歌の掌中に入つた時に、仮名文字によつてなされるべき諸々の方向への発展の欲望がこの和歌の上に集中的に持ち込まれたのは、先づ無理がない。大ざつぱに言へば、和歌のみが文字に書かれる領域での、ラテン的律令文学の圧迫に生き抜いた唯一の自国文学であつた。

まさにこの指摘のとおり、仮名文字以前の古代前期（それこそがわたくしたちが普通いうところの「上代」だが、ここでは混乱をさけてこのようにいつておく）にあつて、「和歌のみが文字に書かれる領域での、ラテン的律令文学の圧迫に生き抜いた唯一の自国文学であつた」のだ。たとえば『古事記』は、たしかに、日本語文を志向した文体でかかれてゐる。しかしそれは、「訓めないが読める」といつた不完全さをまぬかれてゐない。和歌の特権的な地位——あくまでもこの意味において、だが——は古代前期以来のものだつたといふべきだろう。この時点で益田の視線がよりおおく古代前期におよばなかつたことは、さきにものべたようにやむをえない条件下であつたとしても、おしまれることだ。ともあれ、引用をつづけよう。

和歌のみが古代から上代への通路で、そののみが仮名文字を真先に手に入れた。思ふが俚に、自国の語法の俚に慇へ得るものであつたが故に、必然これには複雑な使命が負はされざるを得ない。既に精神的にも都市貴族の生活から、単純な感動の極点

を謳ひ上げる事のみでは満足出来なくなつて、抒情的精神から叙事的精神へ移つてゐた人々が、この一点和歌に抒情以外の要素をも盛り込め、慾望を達成しようとしたのは肯ける事であつた。

これも、ある程度まで古代前期にもあてはめてかんがえることのできる指摘だともう。というより、古代前期和歌文芸のゆたかな達成は、まさにこのことに発している、と、わたくしはかんがえる。だが、いまはそのことにはなしをそらせるわけにはいかない。このあと、きわめて重要な発言がさりげなくなされてゐる。

早くから和歌とは流れを異にして、古代の人々が口から口へと伝へて来た文芸「昔話」をこの新発明の仮名で写し出してゐた。ここにはすでに「歌語り」から「歌物語」への道程が展望されてゐるとみてまちがいないだろう。しかし益田はここでいったん節をあらため、方向を転じて、いよいよこの文学史論の核心、「和歌から物語へ」の転換をかたりだす。

和歌がこの様な非本来的な使命を果たさねばならなかつたと言ふ事は、仮名文字に依つて展開される上代文芸の方向が、明かに和歌よりも和歌以外のものへ向つてゐる事を暗示する。そして叙事文芸と言ふ此の新しい時代の躍り手の傍に、和歌は祝福を与へ、自らが育ての役に當つたが故に、惜しみなく援助の手をさし延べつゝ——即ちそれら叙事文芸の中へ多くの和歌を送りつゝ——上代の初めに獲得した公的貴族生活に於ける地位と、昔乍らの私的生活に於ける抒情の仕事を守つてゆくのであつた。むろん、ここで「叙事文芸」といつてゐるのは、物語文学のことだ。

而して上代文学の眞の担ひ手こそは「物語」であつた。(中略)
上代の「物語」は、我々の原始時代の先祖が、そして古代の先祖が、よしその内容に入れ替りはあらうとも、相承け相繼いで来た所の「昔話」と言ふ口承文芸の血統を脈々と汲んで出発したものであつた。

これ以後しばらく、「昔話」から「物語」への階梯が素描されるが、そこのところはとばして、この論文(一)の検討をおえよう。

*

つぎはいよいよ、「歌語り」論が提唱される『上代文学史稿』案(二)だ。ただしそれは、(一)での文学史的把握のうえにたつておこなわれていること、すでにみてきたことから明白だろう。

しかしこの論文ではまず、(二)の末尾の記述をうけ、『竹取物語』を例にしての口承の「昔話」から物語文学への階梯がたどられる。

そこでは、それが屈折や断絶をもかかえこんでいて、決して単純な、平坦なみちのりではなかったことがかたられるが、そのことにかかづらつていゝとまはない。だが、そこに、のちにかたられることになる「歌語り」から「歌物語」へのみちのりとのアナロジーをみいだすことはさして困難ことではないだろう。「歌語り」論に主眼をおいてこの論文をよんでいるわたしたちは、ここに一種の伏線的な叙述をみいだすことができるというわけだ。

節に付された番号でいえば7にいたつて、和歌が正面からとりあげられることになる。そこで益田が強調するのは、万葉と古今のあいだの断絶の認識だ。

紀記万葉から古今へと眼を移して来た時、余りにその間の相違

が大きいのに驚く外はない。大胆に言ふならば、万葉の歌を愛するならば、古今を憎まざるを得ず、古今の歌に共感を催す脳組織は、万葉に対してさほど快い反応を示さない程である。万葉的なものと古今的なものはそれ程に相隔つてゐる。

この断定をみとめるかいなかは、むずかしいところだろう。たしかに万葉と古今とのあいだにはおきな懸隔がある。しかしまた、和歌史研究は、その間をつなぐところをもおこなつてきた。歴史をパラダイムの転換の連続の相としてみるか、それとも——カビとホコリにまみれた表現かもしれないが——「弁証法的」な発展の相のもとにみるか、ややこしい論議になりそうだが、あえてそのところはさけておこう。ここでは、益田の(あるいはこの時点での通念が)保持していた「万葉と古今とのあいだによこたわる断絶」という認識を、かならずしも絶対的なものとはみない、というわたしたちのたちばを表明しておくにとどめたい。ここでひとことつけくわえておくならば、この様な通念がこの時点で主流だったのは、主として、『古今集』研究よりは『万葉集』研究の決定的なたちおくれがあつたことによるだろう。「国民歌集」の座に安住していたせいでもないだろうが、『万葉集』研究が、文献学的な基礎研究はともかくとして、個々の作品の表現研究においてすら多分に印象批評的なレベルに低回していたことを、いまさらながらにおもわざるをえない。

さて、9だ。こゝでようやく「歌物語」Ⅱ『伊勢物語』がとりあげられる。まず益田は、『伊勢物語』の感動が、和歌自体というよりその叙事性にあることを指摘する。

然し伊勢物語として我々の魂の共鳴を勝ち得てゐるのは、歌の

みではない。と言ふよりも端的には、歌を載せてゐる物語全体であり、その効果を發揮してゐる歌以外の物語部分に就いて考へてみねばならない。実のところを率直に言ふならば、類従本業平集を読んでみても、伊勢のような感動にぶつかれない。同じ歌であつてもである。伊勢を支へてゐるものゝ主要素を歌以外の部分に求めることは一応妥当だと思ふ。と言ふのはこの作品自体が、歌だけに盛り切れぬ心の複雑で即事的な疼きを表現しようとする叙事精神に導かれて、私家集から歌物語へと、いはゞ歌から離脱してきたものであつたのであるから。

ただここで、益田はいささか誤解をまねきやすい説明をつづける。この記述を「歌物語」の実態的な起源についてのそれとかがえてしまふと、おかしいことになるだろう。そうではなくて、あくまでも類型把握の問題としてうけとつておく必要がある。

家集から物語への過渡的な形態として、歌物語を把握する事に異議はない。事実歌物語はさう言ふ歴史の一点にのみ、歴史的階程として発生し消え失せた形態であつた。(中略)和歌を中心とする小譚の連続と言ふ形態が、歴史的一時期にのみ、二度と出て来ない、かががへのないものとして生まれ出たのであつた。

このようにのべているからといって、「歌物語」が「家集」を母体として誕生したといつてゐるわけではないのだ、とうけとつておきたい。

ついで、「歌物語」としての『伊勢物語』と「和歌的説話」としての『大和物語』とを区別する池田亀鑑の主張に理解をしめした益田

は、つぎのようにもいつてゐるが、これも、実際の作品の出現の過程をいつてゐるわけではないことに注意しよう。

伊勢物語の前の段階には、大和物語的な実在人物を主人公とした説話の形態が先行した筈であるといふ事である。大和は寧ろ伊勢に先行する段階であり、この段階を有形であれ、無形であれ、踏み越えて始めて伊勢が姿を現せるのである。

そしてこのあと、益田は、いまだに中古文学・物語研究者のあたまをなやませている（のではないか？）伊勢と大和の出現の逆転現象を説明しようとする。

伊勢物語と大和物語が順序を逆にした形で出現したと言ふ事は、両者を生んだ社会が、既に文芸作品としてより高次な伊勢を生むべき精神的段階にあつて、大和・伊勢を非段階的に展開せしめ得たと言ふべきであらう。仮名文芸の出版がラテン的文芸乃至律令政治にせきとめられて遅かつた為、こゝに至るまで加速度的なせきとめられたものが一度にほとばしる様な展開を続けてゐるといふ事を示すものである。

この説明はいささかくるしいのではないか。このあとに展開される「歌語り」論にあわせてこのところを説明するとすれば、和歌に関する口承の説話、すなわち「歌語り」が、すでに十分にながい歴史をもつていたことを想定する方がわかりやすい。このことが、結局「万葉の歌語り」論につながることになる。伊藤博がのちに「歌語りの世界」「国語と国文学」一九六二年一〇月）指摘するとおりだが、いまはそのことにもかかずらつてゐるひまはない。さきを見ぐことにしよう。「歌語り」が登場するのはつぎの10なのだから。

益田は、ここでそれまであまりかえりみられることのなかった折口信夫の論説をとりあげる。

通常の如く歌物語が私家集から物語へと進む過程として考へられる限り、それは文字文芸の領域に属する。所が折口信夫博士は「歌物語は、多くは口頭で述べられてゐた」と民俗学的な知識と直感とから主張された事がある。かう考へるならば、歌物語は口承文芸の領域に属するものであるが、この両者の関係はどうであらうか。

いうまでもないことだが、この折口説の発掘は、ただ先行説をみつけた、ということにとどまるものではありえない。池田以来の「家集から歌物語へ」というテーゼにとらわれていては、たとえ折口説にであつたとしてもそれをみのがしてしまふだろう。益田のなかで醸成されてきたもの——さきにみておいた、「昔話」をめぐる視点が、それをよくみいだしたといふべきなのではないか。

このステップを経過して、益田はついに「歌語り」の問題にふみこんでいくのだが、そのまえに、益田は古代(古代前期)と上代(古代後期)とのあいだに「歌を中心とした話」の性格のちがいを指摘してとくことをわすれない。なぜここでそのことをとりあげておくかといへば、益田がずつとの中に、伊藤博の「万葉の歌語り」論、とくに伊藤のいう「伝云」型作品についての見解を批判するもの、こゝでしめされているような認識にもとづくものだからだ。

風土記などに見える歌を中心にした話も、確かに語られた事があつたらうから、歌物語として語り継がれた古代口承文芸の存在であつたと思ふ。然しその場合歌物語と言ふにしても、果

して此処で言ふ様なものであつたかどうか。歌を含んだ物語ではあつたらう。然し乍ら、話中に於ける物語と歌との関係が、歌を主体的地位に置いたものであつたかどうか。

こゝでの益田の「歌物語」「物語」の用法は、それらをあくまでも記載の段階をさす用語として、口承のレベルとは峻別するのちの認識からみたばあい、あきらかに妥当をかくものだが、それはいま不問に付しておこう。このような視点から、いよいよ益田は「歌語り」の世界にわけいるあゆみをはじめる。まず益田が注目したのは、つぎのような作品にみられる「歌語り」ということは自体だ。

笛など吹き出でぬるに、我は急ぎても寝られず、人の上などと言ひ、歌など語り、聞くまに、入りぬるこそをかしけれ。

(『枕草子』)

煩ふことある比なりけり、かひぬまの池と言ふ所なんある、人のあやしき歌語りすると聞きて、試みに詠まんと言ふ。

世にふるになそかひぬまのいけらしと思ひそしつむ底は知らねど

(『紫式部集』)

この「歌語り」こそが、歌物語の母体となつた、和歌に関する口承の説話だつたというのだ。そして益田は、それを貴族がみずからのために創出したあたらしい口承の世界だと断ずる。この論文のまさに核心的な部分をつぎにひこう。

「歌語り」の存在はかうして伊勢以後の時代の資料から明らかであるが、かやうな歌語りが伊勢大和の出現によつて可能になつたと見るべきであらうか。逆に伊勢も大和も同じ「歌語り」の産物と見るべきではなからうか。歌物語には口承世界の歌物語

—私はそれを紫式部集の詞書によって「歌語り」と呼んで、文献の歌物語と区別しようと思ふが—が先行してゐた、それだからこそずっと後代にこれは誰の歌と言ふ風に、前代人の歌が記憶されてゐたりするのであつた、と思ふ。

が然しこの「歌語り」は簡単に、昔話と相並んで蕩々と口承世界を流れてゐたものだ、と言ふ見極めをつけてはなるまい。昔話が寧ろ民衆の世界の所産であつて、貴族社会が自ら閉鎖的存在として、それから脱落すると、昔話も彼らの所有とは言へないものとなつてしまつたのに対し、歌語りは寧ろ純粹に貴族の世界の所産であると思はれる。それを古代の歌を含んだ物語の口承と混淆すべきでもあるまい。和歌が漸く宮廷の中心に歩み出て来て、宮廷の文芸と言へば、和歌が第一であつた様な上代初頭に於いて、昔話を育てる民衆の世界とは隔絶して、そこから不斷に口承文芸の輸入を仰ぐのに次第に事欠く状態の下で、貴族達が自己達の昔話を歌中心に作つて行つたのが歌語りであらう。

「歌語り」はだから、上代（古代後期）初頭の、宮廷貴族社会における和歌の隆盛をまつてはじめて誕生したものだった、というのが益田の認識だ。

歌語りと言ふ口承される在り方は、和歌の全盛に呼応したもので、初期の歌合から古今更に後撰へと、叙事的要素が和歌に導入されて来るのに応じた発達を遂げたもので……

「歌語り」はあくまでも「上代」貴族の精神の所産だ、というわけだ。

*

さて、このあとも、「歌語り」と「歌物語」をめぐる益田のきめこまかな、また一方で大胆な考察はつづくのだが、このあたりでこの「上代文学史稿」案をたどるところみを、ひとまずおえようとおもう。ここからさきの検討は、むしろ物語文学の展開過程に関心を有する中古文学研究者のてにゆだねるのが妥当だとおもう。万葉の歌語り論の再検討をめざすわたくしとしては、ここで、益田の「歌語り」概念の確認と、それがのちに展開することになる「万葉の歌語り」論にどのような角度をもつていたかをみておくことにしよう。

再度確認していこう。第一に、益田によれば「歌語り」は、①平安貴族のあらたにうみだした口誦の説話

だ、という点だ。ここでは、それがあくまでも口誦のモノガタリすなわち説話だということともに、「平安貴族のあらたにうみだした」という、時代規定に注目しなければならないだろう。「万葉の歌語り」論が抵触するのは実にこの点なのだから。益田がこのように「歌語り」の発生時期を厳密に規定するのは、ひとつには、和歌史の把握のしかた、もうすこし具体的にいえば、『万葉集』の時代をどのようにとらえるかにかかわっているとおもわれる。それに関連して、もう一点、この説話が、

②和歌にまつわる昔話・世間話

だという点を確認しておかなければならない。それが貴族社会の「昔話」（のちに益田はそれをむしろ「世間話」という語におきかえることになる）だということ、さらに、この点も重要な規定なのだが、それがあくまでも和歌、すなわち記載のウタに関する口誦の説話だ

という点だ。

そこで、以上のふたつをひとつにまとめると、

平安貴族社会に発生した記載のウタに関する口誦の説話ということになるだろう。つまり、時代とウタの性格の規定だ。

さて、文学史用語にかぎらず、あらゆる学問的な概念は、できるかぎり厳密に適用しないと、意味がなくなってしまうかねない。論争の当事者同士が、おなじことばをちがった意味で、あるいはかなりずれた次元で使用したら、論争はなりたたない。ただ、文学史的概念は、ときに、部分的な修正をほどこすことによつて——いわば概念の拡張をおこなうことで——より有効なものになりうる。その概念の本質をかえることなく、より応用性のたかい、あるいは適用範囲のひろいものにすることができる。しかしまた、極端な概念の拡張は、結局その概念の無意味化をもたらしかねない。そのかねあいというものが重要になる。このことを以前に指摘した文章があるので、ひいておこう。

文学史の問題として「歌語り」を論じようとするなら、基本的に益田のあたえた定義をふまえて出発しなければならぬ。もっとも、そのうえで益田の「歌語り」概念にメスを入れ、それを構成するところの諸要素を吟味しなおすことはけつして無意味ではないし、その根幹部分に抵触しないかぎりにおいて、付随的要素の変更をとまなうような概念の拡張も認められるべきだろう。概念の拡張はそれがより包括的で有効な文学史概念になるための不可避の過程ともいふべきものだから。ただし、その拡張がある限度をこえるとき、概念自体の変質あるいは崩

壊をもたらしかねない。しかも実際にはその間に一線をひいて限界をさだめることは不可能にちがひ。

(身崎「万葉集の「歌語り」」『国文学』三七—四、一九九二年四月)

それでは、益田の「歌語り」論の規定のうち、うごかすことのできない根幹の部分、これを拡張したりすると「歌語り」論が崩壊してしまふ、そうした規定はなんだろうか。それは、

記載のウタに関する口誦の説話
ということだとかんがえる。

ここで重要なことは、ウタならばなんでもよいのではない、ということ、それはあくまでも記載のウタなのだということだ。ウタとカタリすなわち口誦の説話とのむすびつきということであれば、記紀のいわゆる「歌謡物語」は、それ自体は記載の文学だということはないが、その背景に、ウタとカタリの融合した口承文芸の存在した可能性は否定できない。というより、大部分の研究者はウタ中心かカタリ中心かはともかくとして、そのような口誦のモノガタリがまづ存在したとかんがえている。そして、なかにはそれを、ひいては記紀の「歌謡物語」自体をも、「歌語り」ということばであらわしている。しかし、これはどちらにしろあやまりだといわねばならない。「歌謡物語」のもとになったウタは、口誦のウタだったとおもわれるからだ。「歌語り」のウタは、あくまでも記載のウタ、要するにことばの厳密な意味での「和歌」でなければならぬ。それはどうか。まえにもひいたが、ここでふたたび、『上代文学史稿』案(二)の、つぎのような文章をおもいだしてみる必要がある。

和歌が漸く宮廷の中心に歩み出て来て、宮廷の文芸と言へば、和歌が第一であつた様な上代初頭に於いて、昔話を育てる民衆の世界とは隔絶して、そこから不断に口承文芸の輸入を仰ぐのに次第に事欠く状勢の下で、貴族達が自己達の昔話を歌中心に作つて行つたのが歌語りであらう。

「歌語り」は、文字以前から存在した口承文芸のなぐれに出現したものではなく、貴族のあたらしい口承文芸であり、宮廷貴族文化の代表としての和歌についての説話だったというのが、益田の「歌語り」論の核心なのだ。

ところで、さきほど、益田の規定を要約したときにしめたのは、平安貴族社会に発生した記載のウタに関する口誦の説話

そしてわたくしが「歌語り」の要件としてまとめておいたのは、

記載のウタに関する口誦の説話

だった。要するにわたくしは、益田が設定した「平安貴族社会」という時代認定をはずした。記載のウタに関する口誦の説話は、平安時代以前にすでに発生していたとかがえるからだ。そもそも、この時代規定があるかぎり、「万葉の歌語り」論はなりたちようがない。事実、益田は「万葉の歌語り」論を容認しない。この問題は、古代和歌史をどうとらえるかという、おおきな問題とかかわっている。

益田にとっては、このところはどうしてもゆずれないところだったはずだ。『上代文学史稿』案の全体像からいえばなるほどそうにちがいない。しかし、わたくしは、ここは修正可能だし、修正しなければならぬとかがえる。

「歌語り」はいつ発生したか。益田はそれを「上代初頭」つまり平

安時代初期、とかがえた。国風暗黒時代をへて、最初の勅撰和歌集があらわれる機運がうまれた時代、和歌が宮廷文芸の代表として君臨するようになった時代、それこそがふさわしいとかがえたのだ。つまり、益田は「書く歌」記載の歌の確立を古今集以後とみ、ひいては古代貴族文化の完成を古代後期、平安時代（つまり、かれのいう「上代」）にみようという大前提にたつていた、『上代文学史稿』案はまさにそのような文学史の構想にもつきかかれていたのだ。しかし、それは一九四〇年代のおわりころの文学史認識にもづくものだということも否定できないだろう。それならば、文学史があたらしい認識によつてかきかえられるならば——万葉和歌の達成をどう評価するか、という認識があらたになるならば——この規定は変更される可能性もあつたとおもう。そして、現実には、益田の「歌語り」論の最初の提唱から一五年ほどもたつて、その時代認定をくつがえして、古代前期、万葉時代にはやくもそれは誕生していた、という学説が登場した。当然のことながらそれは、この間におおきな進展をみせていた『万葉集』研究のがわからなかった。それが、現代の『万葉集』研究を代表するひとり、伊藤博によつて提唱された「万葉の歌語り」論だったのだ。

ここでは、直接には「万葉の歌語り」論の展開や、それに対する批判、反批判の過程をみていくことはしない。それは別稿にゆだねられることになるだろう。ここでは、わたくしが、さきのように規定していること、すなわち益田の「歌語り」論の時代認定を修正するならばにたつことをあらためて表明しておくにとどめよう。

*

最後に、これは「歌語り」論をはなれて、古代文学史全体につながる問題といわなければならないのだが、この論文を通じて益田がとった「歌から物語へ」という文学史展開の把握のしかたについて私見をしるしておきたいとおもう。

はじめにものべておいたように、「歌（和歌）」から「物語」へとという展開あるいは交替、という把握こそがこの論文の基底をなしているとおもわれる。わたくしも、その把握のしかたになかばは同意したいとおもうが、一面でそれが、和歌のはたした文学史的な役わりの過小評価につながりかねないあやうさを感じる。むしろ、益田が単純な進化論的、ジャンル交替論的発想でこの把握のしかたにおもむいたわけではないこと、和歌と「物語」（あるいは散文）とを無造作に価値のはかりにかけているわけでもないことはひとめなればならないだろう。それでも、散文というものののおのずからにもつ批評性、批評精神に優位性をみとめ、一方、万葉批判、あるいはひろくいつて和歌（短歌）批判——この論文をかいていた益田にとつて、「第二芸術論」をめぐる論争はまさに目前で展開されたものだっただけ——の思潮にもところをうごかされないわけにはいかなかっただろう背景をかんがえるとき、そのなにかしかの価値評価がかかわってくることは不可避ではなかったろうか。

たしかに、和歌は、散文のもつ批評性をもちえない。和歌のもつことのできる「力」は、散文とはまったく別のものだろう。しかし、「力」がないのでも、なくなつたのでもない。それは変奏をくりかえしながらいきつづけてきた。「和歌の永続性」ということばにはかなり問題があるとおもうが、和歌のはたした役わりを正當に評価しな

いかぎり、日本文学の歴史を正當に把握することはできないだろう。問題を古代（前期から後期へを通じて）にかぎっていえば、益田の展望した「歌」から「物語」へ、というみちすじとともに、ウタとモノガタリとのかかわりあい、相互交渉の過程という側面へのまなざしをもつべきだろう。「歌語り」論あるいは「歌物語」論は、単に過渡期的な現象、克服されるべき中間的形態としてのみかたられるべきものではないのか。和歌と散文、このあいことなる「力」の結合による文学の可能性という視点が、並行してもとめられなければならない。わたくしの「万葉の歌語り」論は、そのところにつらなっているのだ、とのべて、本稿のむすびとしたい。

（みさき ひさし・北海道大学大学院文学研究科教授）